
CLANNAD-君と歩く坂道で-

森羅万景

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CLANNAD - 君と歩く坂道で -

【Nコード】

N3356G

【作者名】

森羅万景

【あらすじ】

—— 透き通るような、夢を見た。…… 親との争いが原因で一人暮らしをすることになった主人公『朋原秋人』はある朝、学校に向かう途中の坂道で不思議な少女に出逢った。秋人はその少女を見てよく分からない違和感を感じる。そして、そこから始まる、人と人との触れ合いを描く。『key作品の集大成』とまで呼ばれた大人気ADVゲーム『CLANNAD』のオリ主有りの二次創作です。

0・幻想世界1

――透き通るような、夢を見た。

一面真っ白な白銀の大地と、ほの暗い暗灰色の空。
その世界に、俺がいた。

いや、正しく言えば、俺はそこに居ただけど居なかった。その
大地に漂う無数のうつすらとした、輪郭線も無い淡い光の粒。
俺は、その一つだった。

なにもない、物悲しい世界だな。

なんてぼんやり考えていると、何か動くものがあつた。

光になんかなくなってゐるせいで視界はすこぶる悪いんだが、確かに
何か動いていた。

近づく。

そこには少女が居た。

髪は長く明るい茶髪で、雪が薄く積もっていた。

いや、髪だけじゃない。体全体を覆うように雪が被さっていた。

早い話が――その少女はうつ伏せに倒れていた。こんな物悲しい世界で、寒々しいほの暗い空の下で。

声をかけてあげたかった。

でも、俺は無数に漂う光の一つで、無力で、脆くて、どうしようもなく無力だった。

出来たことと言えば、少女の目の前でゆらゆら漂うだけだった。

もどかしい。

と、少女が瞳を開けた。

うつすらと見開いただけのその瞳が、何故だかとても愛おしく感じた。

『来ちゃ……ダメ、だよ……』

少女は言った。

誰に言ったんだろう。この世界には誰も居ないというのに。
いや。

俺か。

俺はここに居る。

『ダメ、だよ……。ここに、あなたは、居ちゃ……。いけないよ』
弱々しく言葉を紡いでいく少女。

その瞳は、間違いなく俺をとらえていた。

何故そんなことを言われなくてはいけないのだろうか。

何故俺はこんなところに居るのだろうか。

何故――

俺は、ここに來てしまったんだろうか。

1・坂道の始まり

不思議な夢を見た。

夢と言えば人の深層意識に眠る願望とか、そういった感じの感覚をイメージとして脳が投射して出来た蜃気楼に近いニユアンスがあるとかなんとかテレビで観たことがある。

まあ、そんな話は置いておいて。

相も変わらず長く続く坂道を俺たちは歩いていた。

季節は春。

うららかに優しく地面を照りつける太陽も、この異様に長い坂道を歩く上では鬱陶しくあった。

「岡崎……春先なのに微妙に暑いんだけど」

「俺だつて暑い」

俺の少し手前を歩く岡崎がわしわしと後頭部をかきむしりながら吐き捨てるように言った。

コイツは『岡崎 朋也』おかざき ともや。

俺が五歳になってここを引越す前に出来た友人で、この春の入学式で十二年越しに再会した奴。

こんな時期に転校なんてしてきたもんだから岡崎も結構驚いていたが、何より教師たちが驚いていた。

まあ、そんな事情があるとはいえ俺はれっきとした高校三年生だ。そんな野郎が今更転校してきたところで面倒以外のなんでもない。

それに『ひかりさかこうとうがっこう光坂高等学校』はこの辺じゃ有名な進学校だから、周り

のクラスメート連中にも歓迎されなかった。

別にイジメだのハブられたりだのはないが、どうせ来年には離れ離れになるような奴と仲良くなってもしかたない——大方そんな考えなんだろう。だからこそ楽だったし、都合がいいと言えば都合がいい。

俺は別に学校になんか行つて真面目に勉強に励む気はさらさらないのだ。

喧嘩別れした親父が転入手続きを勝手に取り計らい、こんな面倒極まらないことになったんだ。

まあおかげで親父の下を離れて一人暮らしさせてもらつてゐるのだからせめて卒業くらいなら……と考えて、今日もこうして例によつて大幅に遅刻しつつ見上げれば未だ遙か向こうに霞んで見える校舎に向かつて歩いている。

「はあ……」

岡崎が大きく溜め息を吐いた。

ちなみに、俺と岡崎は現在の境遇がわりと近い。

あくまで岡崎から聞いた話だから確証は無いが、岡崎は親父さんと上手くやっていけないみたいだ。

中学卒業の少し前に派手に喧嘩をしたつきり、顔を合わせたくないからと言つて夜遅くまで家に帰らずブラブラしているらしい。

親父と上手くいつてない。

そんな不思議な共通項と、昔の付き合いで俺たちはツルんでいる。あともう一人『^{すのはい}春原 ^{ようへい}陽平』って奴もいるが、コイツの話はまた後でいい。

今は岡崎に溜め息の理由を聞いてみたかった。

「なんだ、少し早い五月病か？」

「ちげえよ。……ただ、このまま過ごしてるだけで、何かが変わんのかなって」

「ははっ。何も変わりやしねえって、俺もお前も。これからもつまなくてクソ面白くもねえ人生歩くだけだ」

何か自分で言ってる虚しくなった。
負け組。

まさに今の俺に相応しい言葉だった。

岡崎と俺、どちらともなく盛大に溜め息を吐いた。
校門まで、あと二百メートルくらい。

その時――

「……はあ」

「ん？」

俺たちとは違う溜め息が聞こえた。

隣を見た。岡崎と目が合い、アッチも俺を見ていた。互いに首を気だるく傾けた。

声の主を確認するためだ。

まだ少し幼さがある女の声だから気になったともいう。

「はぁ……」

俺たちが歩いていた少し前、そこにソイツは居た。

短い茶髪を、生暖かな春風に揺らすソイツは、俺たちには目も暮れずただただ遠く向こうに聳える校門を眺めていた。

「——っ……」

今のは、なんだ？

俺は、いきなり走った何だかよく分からない頭痛に顔をしかめた。岡崎が怪訝そうに俺を見たが無視。岡崎はそのまま怪訝そうな顔つきのまま視線を少女に戻す。

俺は首を軽く左右に振り、鬱陶しい頭痛を霧散させる。

何だか、不思議な感覚だった。

懐かしい？

いや、悲しい？

鼻の奥がツンとして、足に力が入らなくなった。
しかしそれは一瞬。いったい何だったんだか。

視線をソイツに戻す。

ソイツはやはり俺たちに気付くこと無く、首をうんうんっ、と言った感じに縦に振っていた。

「——あんパンっ」

「……？」

あんパン……？

何かの暗喩か比喩だろうか。

「……あなたは、この学校が好きですか」

ソイツは視線を真っ直ぐ坂道の向こうに固定したまま、呟くような囁くような声量で言った。

「私はとつてもとつても大好きです。でも、何もかも変わらずにはいられないです」

淡々と紡がれる言葉。

「嬉しいことも、悲しいことも、全部。全部、変わらずにはいられないです」

眉を僅かに寄せ、ソイツはそこに居るんだろう誰かに言葉を紡ぎ続ける。

「——それでも、あなたはこの場所を好きでいられますか……？」

「——っ……！」

……まただ。またあの頭痛だ。

眉をしかめて舌打ちすること何とか誤魔化し、ふっ、と小さく息を出す。

そして、

「探せば、いいだろ」

俺はそう言っていた。

ほとんど無意識の内に、そう言っていた。

と、そこでソイツは初めて俺たちの存在に気付いたらしく、僅かに驚いたように振り向いた。

だが構わず続ける。

「だから、楽しいことも、悲しいことも……無くなっちまったり忘れたりしちまったら、また新しく探せばいいだろ？」

アンタの楽しいことや、悲しいことってのは一つだけじゃあ無いだろ？」

「——それは、そうですね……」

「行こうぜ」

ソイツは何か言いたげな顔をしてたけど無視。

俺はソイツに声をかけ、岡崎の肩を軽く叩き歩き出した。

岡崎は終始怪訝な顔をしていたが、大人しくソイツを一度眺めて

俺の横に。

ソイツは、俺の後ろをパタパタと小走りについてきた。

——俺たちは、“また”登り始めたんだ。長い長い、坂道を。

——“また”……？

何で“また”なんて浮かんできたんだろうか。

まあ……いつか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3356g/>

CLANNAD-君と歩く坂道で-

2010年10月10日14時05分発行